

84 愛知医学校校長 後藤新平 — 名大をひきいた人びと① —

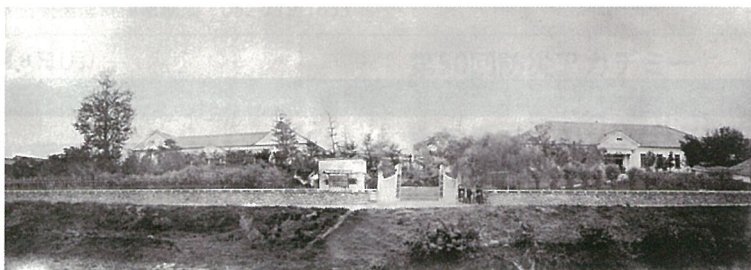
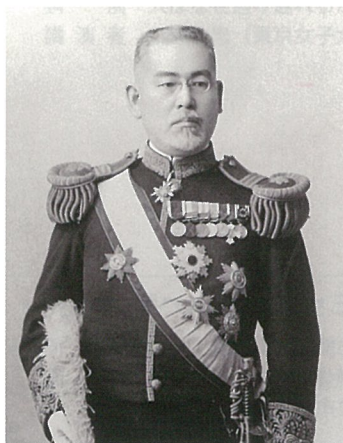
後藤新平（1857-1929）といえば、衛生・植民地・鉄道・都市行政や外交などに広く手腕を発揮し、通信大臣、内務大臣、外務大臣などを歴任した、近代日本を代表する官僚・政治家の1人としてつとに有名です。その後藤のキャリアの出発点が名大の源流にありました。

後藤は安政4年、水沢藩士の子として現在の岩手県奥州市に生まれました。水沢藩が戊辰戦争で新政府に敵対したこともあって苦学のすえ、1876(明治9)年に医師として就職したのが、名大医学部の前身にあたる愛知県公立病院(81年に愛知病院)だったのです。

最初は安月給の三等医でしたが、病院内にあった医学校(81年に愛知医学校)には、お雇い外国人ローレツと司馬凌海という、ドイツの医学や衛生学を学ぶには当代最高の人物がいました。やがて後藤はめざましい出世をとげ、81年に24歳の若さで医学校長兼病院長となり、83年までその職にありました。

当時の愛知病院は、まだ内科と外科の区別もないような状態で、早急に基礎を確立する必要に迫られていました。後藤校長は思い切った人事を断行し、当時きわめて貴重だった日本人医学士を4名も採用しました。奈良坂源一郎や熊谷幸之輔など、後藤が去ったのちの愛知医学校を担った人材もこの時に着任しています。そして彼らを中心にして、組織の整備をおこないました。その結果、愛知医学校は全国でも有名になり、83年には数少ない甲種医学校に選定されました。もしこの時、乙種にあまんにていたら、愛知医学校ひいては名古屋大学の歴史も少なからず変わっていたかもしれません。

また、この時代のエピソードとして、「板垣死すとも自由は死せず」で有名な、1882年の岐阜における板垣退助遭難事件があります。自由党と関わって政府にいらまれることを恐れて誰もが尻ごみするなか、後藤病院長が板垣の診察にかけつけた話です。



1	2	3
4		

1. 後藤新平とローレツ（奥州市立後藤新平記念館提供）
2. 通信大臣時代（1908～13年頃）の後藤新平（同上）
3. 「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」（名古屋大学附属図書館医学部分館所蔵）。ローレツの依頼によって描かれた。中央で執刀しているのが後藤新平、左端がローレツ（老烈）とされる。
4. 1884(明治17)年頃の愛知医学校・愛知病院（天王崎、現在の名古屋市栄1丁目、トーエネック(株)本社あたり）。後藤の校長時代もここにあった。2007(平成19)年、写真にあたる堀川河岸に愛知医学校記念碑が建立された。

名古屋大学基金

名古屋大学基金へのご寄附をお願い申し上げます。この基金は、平成18年3月に創設され、学生育英事業、教育・研究環境整備事業、国際交流事業などの充実のために活用されます。ご寄附のお申し込み、お問い合わせは秘書課（基金事務局）あて（電話 052-789-4993, 5759、Eメール kikin@post.jimu.nagoya-u.ac.jp）をお願いいたします。